

脳原性障害児の下肢に対する整形外科的 選択的痙性コントロール術の中期成績

なか 寺 尚 志 き 木 原 清

キーワード：脳性麻痺，整形外科的選択的痙性コントロール術

要 旨

脳原性障害児者に対して平成12年より当センターでは松尾の整形外科的選択的痙性コントロール術を一貫して施行し，短期成績が良好であることを平成13年の島根医学で発表した。今回，15歳以下の小児期に手術を施行し2年以上経過した症例の中期成績をまとめた。対象は脳原性障害児13例で病型は痙性両麻痺7例，片麻痺6例，手術時平均年齢は8歳10ヵ月，運動レベルは歩行車でなんとか歩行できる以上であった。これらに対して歩行獲得，歩容改善の目的で股，膝，足に手術を施行した。平均経過観察期間は4年7ヵ月であった。結果は歩行車歩行が40メートル前後の支持無し歩行へ，尖足歩行の消失等いずれも良好であった。尖足の再発が2例に認められたが再手術後再び良好な歩容となった。粗大運動発達がプラトーになる8歳以上でも改善が持続している症例もありこの手術は術後の改善だけでなく，その後の機能改善も期待できる可能性を示した。この恩恵をより多くの障害児者に捧げたい。

はじめに

私たちは平成12年より脳性麻痺を中心とする脳原性障害児者に対して松尾の整形外科的選択的痙性コントロール術（Orthopedic Selective Spastic Control Surgery 以下 OSSCS）を一貫して行っている。今回，15歳以下の小児期に手術を施行した症例のうち，術後2年以上経過した症例の

中期成績を調査したので報告し，OSSCSの有効性について考察する。

対 象

脳原性疾患13例（脳性麻痺12例，ライ症候群1例），病型は痙性両麻痺7例，痙性片麻痺6例，初回手術時年齢は5歳4ヵ月～15歳10ヵ月（平均8歳10ヵ月），運動レベルは粗大運動能力分類システム（Gross Motor Function Classification System 以下 GMFCS）¹⁾で歩行補助具を使って歩くが屋外と近隣を歩く際に制限があるレベルⅢ；

Takashi NAKADERA et al.

西部島根心身障害医療福祉センター 整形外科
連絡先：〒695-0001 島根県江津市渡津町1926